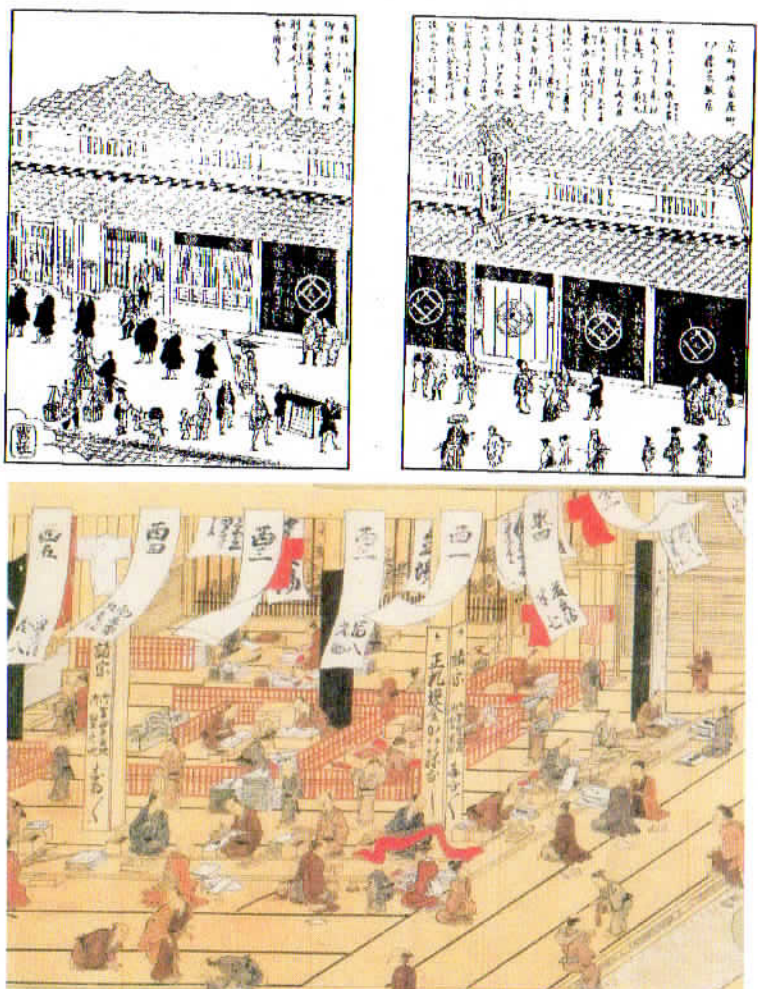




伊藤次郎左衛門家

四百年



NPO 法人揚輝荘の会

伊藤次郎左衛門家400年

平成23年7月22日

年号	伊藤家	家督	できごと (伊藤家・松坂屋)	社会のできごと
1570 元亀	始祖 祐広	始祖 祐広		
1573	1573 初代 祐道	1573	天正元(1573) 河内若江城で祐広戦死(11月23日) 遺児、美濃国可児郡久々利の千村平右衛門良重(初代、当代・14代木曾義明)のもとで成長、源左衛門祐道として信長に仕える(蘭丸、妻千村良重の姪)	信長三好義継攻め(若江城、11月16日落城) 木曾古文書歴史館(可児市久々利)
天正		初代 祐道	天正10(1582) 蘭丸祐道、信長と犬山の銀名水に立ち寄る、武田攻め (犬山旧奥村邸に信長と二蘭丸の絵あり)	本能寺の変⇒祐道久々利に退く
1592 文禄			天正14(1594) 清須へ出て商人に(源左衛門)	
1596				
慶長		1609 2代 祐基	慶長 5(1600)	関が原の戦い
			慶長 8(1603) 清洲山王社(日吉神社)に末社建立、絵馬・燈籠奉納(尾張名所図会)	江戸幕府開く
			慶長15(1610) 白挽き歌「思いがけざる名古屋ができて、花の清須は野となろう」	名古屋開府 清須越 竹中藤兵衛(菅原町) (7万人)
			慶長16(1611) 伊藤家清須越、蘭丸改め源左衛門祐道(妻・千村平右衛門の姪)が本町で呉服小間物問屋開業(伊藤屋創業、呉服太物商説あり)	
			慶長18(1613) 伊藤仁兵衛信宗(祐道の兄)清須越、(両替商)茶屋町⇒両替町	城下町割(碁盤割)、東西10・南北12画
			慶長19(1614)	茶屋四郎次郎、尾張徳川家へ付属される
1615 元和	1615	1615 2代 祐基	元和元(1615) 祐道、後事を妻(美濃久々利・千村氏)に託して出陣(2月13日)、大坂夏の陣(後藤又兵衛の陣)で戦死	大坂夏の陣(5月6日)小松山の戦い、5月8日 大坂城落城、十一屋(丸栄)創業 柏原市安福寺に両軍戦死者の碑(珂憶上人) 安福寺は尾張二代光友菩提寺、祐良寄進灯籠
1624				
寛永		1640 3代 祐藏	寛永15(1639)	家光、士農工商、鎖国令。株仲間制度、禁教
1644 正保			正保元(1644)	関戸五兵衛、春日井郡小木村から名古屋へ
1648 慶安				
1652 承応				
1655 明暦			明暦3(1657)	明暦の大火、江戸城天守閣焼失
1658				
万治			万治2(1659) 祐基(すけもと)茶屋町の呉服小間物問屋再開業間口4間(60両) (11月25日以降250年営業)、次郎左衛門名乗る	
			万治3(1660) 開店50日で店舗焼失、尾張藩から材木拝領再建、京都から商品を仕入れて薄利多売	名古屋、万治の大火・左義長火事(1月14日) 広小路できる

1661 寛文	1661 4代 祐政	祐基	祐藏	1661 3代 祐藏	寛文元(1661) 祐基、祐藏(すけくら)に家督を譲る、祐基出家(道智)	
					寛文3(1663) 祐藏、店を新築拡張	
					寛文5(1665)	大坂城天守、落雷で焼失
					寛文7(1667) 店員4人、下男2人、下女3人(間口6間半)	
					寛文年間 珂憶上人、「大坂夏の陣両軍戦没者供養塔」小松山・安福寺山頂に建立	
1673 延宝		1673			延宝元(1673)	越後屋呉服店開業
					延宝8(1680) 祐政家督(京町桜井氏からの養子、妻伊藤仁兵衛家)祐藏隠居(道貞) 珂憶上人に帰依し、安福寺に髪を埋めて碑を建てた(元禄2)	初めてのご用金⇒光友の信任
1681 天和			1680 4代 祐政		祐政、泉州堺でオランダから更紗、モスリン(唐縮緬)を仕入れる	
1684 貞享						
1688 元禄					貞享元(1684) ここから慶応4年(1868)までの184年間「奉公人関係証文」残る(奉公人請状、身元引請一札、村送一札、寺送一札)	
	1694 5代 祐寿				元禄元(1688)	元禄文化開花、商工業繁栄
					元禄2(1688) この年から安永3年(1774)までの80余年の「御触留帳」残る	
					元禄6(1693)	尾張三代綱誠(つななり)家督
					元禄10(1697) 尾張藩、市中の商人に調達金を課す	水口屋(小川伝兵衛)、名古屋に移る
		1698			元禄11(1698) 茶屋町第1の本店に(間口10間、奥行20間、200坪)	
					元禄12(1699)	尾張四代吉通(よしみち)家督
1704 宝永					宝永4(1704)	江戸越後屋、反対にあい名古屋出店中止
1711 正徳						
1716 享保					正徳3(1713)	尾張六代継友家督(緊縮政策)
					享保元(1716)	八代吉宗、享保の改革(倭約令)
				1717 5代 祐寿	享保2(1717) 祐寿(すけひさ)家督(24歳)、祐政隠居して治助に	京都伏見に大文字屋開業(後の大丸)
					享保年中	内田忠蔵、知多郡内海から名古屋へ移る
	1721 6代				享保13(1728)	京都大丸屋、名古屋本町に呉服問屋開業⇒明治43年閉店
					享保15(1730)	尾張七代宗春襲封、景気振興策、歌舞伎、遊郭
1736 元文	1728 7代 祐潜				元文元(1736) 祐寿、呉服問屋から呉服太物小売商に転業、6ヶ条の元文掟書「人の利するところわれも利する」「正札、現金かけねなし」それ以前は「二節季払い」「極月払い・12月」顧客奉仕・顧客平等の理念、質素倹約、商業帳簿7種制定(顧客層の変化)	吉宗、元文の改鋳(デフレ政策)金165%、銀150%⇒差損
	1724 8代 祐清				元文4(1739)	宗春蟄居、尾張八代宗勝(美濃高須藩主)
	1735 9代 祐正		1739 11代 祐恵		元文5(1740) 尾張藩の呉服御用を拝命する(それまでは茶屋家独占)	

1741 寛保	祐寿 1733 10代 宇多	祐恵			
1744 延享					
			1745 6代 祐圭	延享2(1745) 祐寿、京都室町錦小路上ルに仕入店開設、7ヶ条の店則 家督祐圭(すけかど)	
				延享4(1747) 蘭兮織(帯地)を考案し、大評判となる	
1748 寛延				寛延1(1748) 祐寿(蘭兮)、14ヶ条掟書を定める(主人心得、別家役割、別家署判)	日勤別家、在宅別家(藤倉屋)、後代別家 (女系相続)(国宅別家) (日勤別家の嫡男)
			7代 祐潜	寛延2(1749) 京都店、新町六角下ル(現在地)に移転、京岡崎御所稲荷「宝永5 (1708)仙洞御所から遷したもの」から豊彦稲荷を分祀	
			8代 祐清	寛延3(1750)	尾張藩、「寛延旧家集」を編集
1751 宝暦				10年で店主4度も変わる、番頭伊比儀兵衛らの努力で危機乗り越える 伊藤家横領を企む(海東郡桂村の松次郎が祐寿の実子と申し出)	名古屋城宝暦の大改修(伊藤家に現物図面)
			9代 祐正	宝暦3(1753)	
			10代 宇多	宝暦5(1755) 十代宇多、8年間家督 宝暦11(1761)	尾張九代宗睦(むねちか)、倅約令、商況沈滞
1764 明和	1764 12代 祐躬	祐恵	1763 11代	宝暦13(1763) 祐恵(すけよし)家督(桑名荒木善兵衛と伊藤家出の左奈の次男)	
				明和元(1764) 茶屋町隣接地買収(100両)、店舗と居宅区別	
				明和2(1765) 三河刈谷城下で商売を許さる	
				明和4(1767) 祐恵、家訓・永代家相続掟目を定める(17カ条) 営業方針	田沼意次側用人(重農主義⇒重商主義)
				明和5(1768) 上野の「松坂屋」利兵衛を4517両で買い取り、(居抜き) 「いとう松坂屋」に(鶴店)、江戸進出を果たす、商標いとう丸	*江戸後期までは、1両は現在の約4万円 尾州家江戸邸、加賀前田家御用
1772 安永				安永元(1772) 上野店全焼、名古屋本店より1万5千両、新店舗開店大売出し	田沼意次老中、町人文化繁栄
1781 天明				安永3(1774) 各店服務規定	
				天明元(1781) 名古屋店焼失、茶屋町間口25間	
1789 寛政				天明8(1788) 京店全焼(団栗火事)	松平定信老中(1787)寛政の倅約令
				寛政元(1789) 名古屋店、新築開店大売出し大盛況、引札3万6千枚、初日260両2分	
		寛政3(1791) 上野店全焼、京店再建			
		寛政4(1792) 上野店、新店舗開店大売出し、初3日間売り上げ875両4分	尾張藩札(米札)発行、ロシア使節根室へ		
		寛政5(1793) 岡崎支店開設			
		寛政6(1794) 上野店、江戸呉服組に加入(松坂屋利兵衛)			
	1796 12代 祐躬	寛政8(1796) 祐躬(すけみ)家督			
		寛政10(1798) 藩主お目見、町方役所御勝手御用達に(十人衆の1人)、自分一札	⇒キリシタンでないことの証明		
		寛政12(1800) 尾張藩から7人扶持を受け、御紋付絵符を許される 江戸藩邸「お召服御用」	尾張十代斉朝(なりとも)		
		享和3(1803) 商方会所の一員となる、10人仲間(10人衆)	尾張藩、商方(町方)、農方(地方)会所を設ける (米切手、正金の引替)		
		文化2(1805) 江戸大伝馬町1に木綿問屋開業(亀店、後のサンメン商事)、江戸入 荷商品・口銭4分節減、勘定所御勝手御用達、尾州江戸藩邸御用商 44ヶ条の店則	尾張藩御用達三家衆(伊藤、関戸、内田)		
		文化3(1806) 尾張藩、米切手(米札)の正金引替方(金融業)を命じる 幕府御用金17万2250両、内松坂屋利兵衛15百両(この年売上、3万両) 亀店類焼、以降5度の類焼			
		1806			

	祐躬		1807	祐躬		
					文化10(1813)	上野店新築、3日間大売出し
					文化11(1814)	蜀山人「あたらしきみつ葉よつ葉の松坂屋いとうるほいも深き春雨」
1818 文政						この頃「猿猴庵の本」高力種信
	1822 13代 祐良					
	1827		1827 13代 祐良	文政10(1827)	祐良6歳で家督(別家衆の交代制、合議制)	
				文政11(1828)	亀店類焼	
				文政12(1829)	茶屋町本家に天神社を祀る	
1830 天保				文政13(1830)		そごう創業(大阪)
				文政14(1831)		高島屋創業(京都)
				天保4(1833)	上野店、飢餓救済金179両、北町奉行から褒詞 尾州徳川お召服承り手違い、御用差止め	天保大飢饉、大凶作、うちこわし、 強訴、逃散
				天保5(1834)	熱田前新田12町歩を拝領、呉服所名目を許される、名字帯刀 祐良1万両上納(前年のとがめ許される)、商号「伊藤屋」⇒「いとう」	「尾張名所図会」全13巻小田切春江
				天保10(1839)	呉服切手流通⇒商品切手⇒商品券	
				天保12(1841)	「伊藤とかけて仙台銭と解く、心は田舎出来でも日本通用」 『青窓紀聞』	水野忠邦・天保の改革(贅沢禁止、絹物販売 禁止株仲間制度禁止、御用金)、
				天保13(1842)	大般若経600巻の写経始める、正金融通方世話人、御用金4万両	
				天保15(1844)	上野店、御用金200両	
1844 弘化						
1848 嘉永		1848 14代 祐昌		弘化2(1845)	京・御所稲荷石垣修復・勧進帳あり(158名)	水口屋、営業を廃す このころ土方歳三、亀店、上野店勤務
				嘉永3(1850)	高祖絵詞伝完成、御用金・三人衆で4万両	
				嘉永4(1851)	株仲間制度復活	
				嘉永5(1852)		世界最初の百貨店「ボンマルシェ」、創業
				嘉永6(1853)	お帳綴じに別家10人出勤	黒船到来
1854 安政				安政元(1854)		日米和親条約
				安政2(1855)	上野店倒壊、土蔵11戸焼失	安政大地震(死者10万人)
				安政3(1856)	上野店開店大売出し、引札5万5千枚、売上3日で3150両、竹中藤右衛門 ・名古屋で本普請建前、切組みして船で江戸へ、御用金1500両、 名古屋車町に木綿問屋を開業(松店)、御用金1万8千両	
				安政5(1858)	亀店、4度目の全焼	安政の大獄
1860 万延				万延元(1860)	祐良、京都三福寺、柏原市安福寺に三・四・五代の位牌を納める	井伊大老、暗殺
1861 文久				文久元(1861)	上野店、御用金295両	
				文久2(1862)	祐良、大般若経600巻の写経完成、岡谷家のため写経開始	
				文久3(1863)	上野店、御用金185両	*文久3頃、1両は現在の約16000円
1864 元治				元治元(1864)	京店焼失、御用金2500両、尾張藩内・軍事費30万両、米切手の 回収費90万両、祐良安福寺に灯籠1対寄進(祐道の250回忌)	禁門(蛤御門)の変
1865				慶応元(1865)	上野店御用金600両	

慶応	祐良 祐昌	1866 14代 祐昌	慶応2(1866)	祐良隠居、十四代祐昌家督(19歳)	薩長同盟
1868 明治			慶応3(1867)	*この頃、1両は現在の3440円	大政奉還、王政復古
			慶応4(1868) 明治元	上野松坂屋焼け残る、町内へ281両、炊き出し、お城御用達出入りの門鑑(上野松坂屋、越後屋、白木屋、大丸屋)、名古屋店員132名→90余名、東征軍へ御用金(有栖川軍500両、尾張藩4千両)	上野戦争(官軍本営)、明治維新 尾張藩30万8千両藩債 伊藤・関戸家4千両、内田家2千両
			明治2(1869)	祐昌、名古屋藩通商会社初代総頭取、権少属、会計係(為替会)	版籍奉還、尾張藩藩債345万両余、米1240石
			明治3(1870)	水害救済金500両、明治天皇御東行・呉服御用達、金鯢献納	
			明治4(1871)	犬山に出張所、岐阜釜石町に支店	廃藩置県
			明治6(1873)	藩債問題①天保14(1843)以前の藩債失効②弘化元(1844)～慶応3(1867)までの藩債は公債として明治5年から50ヵ年賦・無利息償還、伊藤・関戸家(取次調達・肩代わり)、関戸家当主急逝	太政官布告
			明治7(1874)	祐昌、博覧会、発起人・開催係、ゑびす屋買収 新貨条例、1両⇒1円(太政官札、国立銀行)	東別院、博覧会開催
			明治8(1875)	愛知県為替方御用となり、茶屋町角に出納所を開設、大阪新町通「ゑびす屋いとう呉服店」を開店、ゑびす屋は享保年間に紀州の島田善右衛門創業、将軍吉宗から拝領の蛭子神像と盃あり	中村呉服店創業(広小路本町角)
			明治10(1877)	第十一国立銀行を設立、発起人・祐昌(頭取)・岡谷惣助・関戸守彦・伊藤忠左衛門・高松長兵衛・武藤勘七・吹原九郎三郎・岡田長三郎・中村次郎太(御用達商人)資本金10万円 名古屋本店104名(店員10、外売店員75名、下男12、下女7)	公金預金、兌換紙幣発行 西南戦争、軍備調達、不換紙幣、インフレ 上野で第1回内国勸業博覧会
		1878 15代 祐民	明治11(1878)	総見寺境内の名古屋勸業博物館長となる(その後、愛知県立愛知博物館→愛知県商業陳列館)	*明治前半の1円は現在の2万円くらい
			明治12(1879)	祐昌、代表となって金鯢を天守閣へ復旧	
			明治14(1881)	名古屋商法会議所設立、祐昌、初代会頭、伊藤銀行設立(名古屋で最初の私立銀行)資本金10万円、藩債(30万両)を銀行株式に替え完済 正月売り出し・3509円	松方正義大蔵卿(増税、歳費節減、緊縮財政 不換紙幣償却、正貨蓄積)
			明治15(1882)	名古屋銀行創立(滝兵右衛門、小出庄兵衛ら10名)	日本銀行創設、松方デフレ
			明治20(1887)	広小路拡張延長、(名古屋区長・吉田禄在)	大日本憲法発布
			明治22(1889)		東海道線全通、名古屋市誕生、名古屋電燈
			明治24(1891)	祐良没「木のもとのかりねはさめてふるさとに花のにしきをきてやかえらむ」、岐阜店焼失、愛知県に500円、岐阜県に100円寄付	濃尾大地震(死者7000人余)
			明治26(1893)	伊藤貯蓄銀行(後の協和銀行・資本金10万円)を独立させる	
			明治27(1894)	上野店様式簿記を導入	日清戦争
			明治29(1896)	初売りに集まった客が将棋倒し 「乙鳥や赤い暖簾の松坂屋」漱石、松山から子規へ	愛知銀行創立(徳川義札、祐昌等発起人)、 明治銀行創立(奥田正香、神野金之助等)
			明治31(1898)		路面電車(久屋町⇄笹島)
			明治33(1900)	商号「いとう」⇒「いとう呉服店」	
			明治34(1901)	祐昌、店則43ヶ条を制定(接客、品揃え、店員心得など)明治の掟書	
			明治37(1904)	軍用ふとん4000枚(13000円)	日露戦争、三井を三越呉服店・デパート、 日暹(泰)寺創建
			明治38(1905)	名古屋店で元禄衣装陳列会。立ち売り大賑わい、ショーケース	
			明治39(1906)	宣伝誌「衣(きもの)道楽」発刊(明治43「モーラ」に改題)、通信販売	

1912 大正	祐茲		祐昌	祐民	祐昌	明治40(1907)	金子堅太郎伯から欧米のデパートメントストアの話しを聞く、「いとう呉服店和服裁縫所」設立(昭和4・常磐裁縫塾、昭和21・常磐女学院)合資会社いとう呉服店(資本金25万円)、上野店新店開店・座売り廃止・陳列式立売販売、ショーウィンドウ	名古屋市役所全焼、上野公園博覧会
						明治41(1908)	市役所跡地を買収、90300円(市記録・坪156円、577坪、9万円)、祐民の意見書、祐昌を説得	*明治後半の1円は現在の2万円くらい
						明治42(1909)	伊藤産業合名会社設立(資本金30万円)、大阪店一時閉鎖、祐民、渡米実業団の一員として米国視察(渋沢栄一団長)	渋沢栄一団長
						明治43(1910)	株式会社「いとう呉服店」設立、資本金50万円、社長祐民(33歳)支配人三代鬼頭幸七(34歳)、中区栄町に百貨店開店(鈴木禎次設計)、入場客4万人⇒名古屋の人口40万人、祐民オッタマ師と出会う	名古屋開府300年記念祭、鶴舞公園・噴水塔・奏楽堂、第10回関西府県連合会共進会大丸呉服店(本町通り)閉店
						明治44(1911)	「いとう呉服店少年音楽隊」結成、昭和10年・松坂屋シンフォニー昭和13年・中央音響楽団、⇒東京フィルハーモニーへ	
						大正2(1913)	鬼頭幸七専務、祐民名古屋商業会議所議員(36歳)	
						大正3(1914)		第一次世界大戦勃発、銀行取り付け騒ぎ
						大正4(1915)	矢場町五ノ切(1400坪)・大阪日本橋(800坪)買収、「京都仕入店」と改称、店報第1号発行、ビルマから留学生6人を預かり、老松町に	十一屋呉服店、栄町に開店
						大正5(1916)	伊藤家3百年祭を清洲日吉神社で開催、祐民、ハルピン・奉天など視察、資本金100万円	
						大正6(1917)	上野店、4階建百貨店として新築開店(鈴木禎次設計)、外套預かり禁止、祐民・支那視察、茶屋町から三賞亭を揚輝荘へ、伊藤銀行社長・名古屋製陶所社長就任	
						大正7(1918)	資本金200万、店員物故者建碑(光明寺)、山東窯業設立、三賞亭	米騒動、第一次世界大戦終了
						大正8(1919)	揚輝荘座敷落成	
						大正9(1920)	会社創立10周年、資本金500万円、信条布達「良品廉価」など、新安値大売出し「俄然暴落大売出し」、千歳殖産設立(関戸家と)	株式大暴落
						大正10(1921)	祐民、中国遊覧	
						大正11(1922)	祐民、欧米視察、揚輝荘・有芳軒	
						大正12(1923)	大阪店日本橋で再開、資本金1000万円、上野店罹災し全焼、池の端社宅飯店舗、祐民・駆逐艦で上京・支援、東京市庁被害者物資配給、竹中組・大阪で準備、突貫工事で12月10日竣工オープン3日間で18000人、産地仕入、食品等生活必需品を幅広く扱う	関東大震災(74000人余)
					1924 15代 祐民	大正13(1924)	祐民(すけたみ)十五代襲名、銀座店開店、土足入場、マリーナ会長	
						大正14(1925)	南大津町に新百貨店を新築、社名を「松坂屋」に統一、大衆娯楽施設を取り入れ。栄町角に「栄屋」開店 会社創立15周年記念式(揚輝荘、玉手山安福寺) 安福寺に灯籠1対・松坂屋社員先亡精霊の碑	省線御徒町駅開通
						大正15(1926)	名古屋店屋上、豊彦稲荷遷座祭、上野店・下足預かり廃止、銀座店屋上動物園、誠工舎創立	
1926 昭和						昭和2(1927)	資本金1200万円、名古屋商業会議所会頭、高松宮揚輝荘滞在、揚輝荘豊彦稲荷勧請「寄進帳」(3千2百余名)	

祐茲	1932 17代 祐洋	祐昌 1930	祐民	祐民	昭和4(1929)	上野店7階建本館開店、来客12~13万人、名古屋商工会議所 初代会頭就任(商工会議所法)、松栄食品創立、 <u>揚輝荘・伴華楼</u>	世界恐慌
					昭和5(1930)	<u>祐昌</u> 没「訪ふ人の帰りしあとにあかでみし、紅葉も雨に散りはてに けり」、上野店地下鉄と直結、会社創立20周年	
					昭和6(1931)	資本金1500万円、 <u>染織参考館</u> 開設	満州事変
					昭和7(1932)	静岡店開店、鬼頭幸七専務定年退職	
					昭和8(1933)	<u>祐民</u> 、社長・公職引退、財団法人「 <u>衆善会</u> 」設立、銀座店完全洋装	
					昭和9(1934)	<u>祐民</u> 、 <u>ビルマ・インド佛蹟巡拝</u> (千代、ハリハラン、長谷川伝次郎)、 帰国後、16ミリフィルム映写会・講演会150回	*大正・昭和戦前の1円は今の5万円くらい
					昭和11(1936)	<u>揚輝荘ヘシヤムからの留学生</u>	2・26事件、日独防共協定
					昭和12(1937)	名古屋・大阪店全館完成、資本金2000万円、下奥田町に衆善館建設、 名古屋日遷協会会長、 <u>揚輝荘・聴松閣竣工</u>	名古屋汎太平洋博覧会、百貨店法成立、 日華事変
					昭和13(1938)	<u>ハリハラン聴松閣壁画</u>	
				1939 16代 祐茲	昭和14(1939)	十六代 <u>祐茲</u> (すけしげ)襲名(伊藤銀行昭和ホール)	
					昭和15(1940)	<u>祐民</u> 没「世のつとめさわることなくをえし身のみ親のもとにかへる うれしさ」、東京音楽協会霊前表彰(<u>山田耕筰</u>) 会社創立30周年、静岡店類焼	奢侈品等製造販売禁止(贅沢禁止令、7.7 禁)米飯販売禁止、米・砂糖・マッチ配給制 王精衛(汪兆銘)南京政府樹立、紀元2600年
					昭和16(1941)	えびす屋(呉服総合前売問屋)創立、大阪店・不用品交換即売会	東海銀行設立(伊藤銀行、愛知銀行、 名古屋銀行合併)、太平洋戦争開戦
					昭和17(1942)	戦時下の「店員訓」、香港営業所、社長辞任(物価統制令違反)	衣料切符制度
					昭和18(1943)	上野店中古品売り場	
					昭和19(1944)	金・銀・白金・ダイヤモンド買上業務代行、汪兆銘夫人・勝沼精三 <u>揚輝荘視察・聴松閣東海軍司令部第二部隊長宿舎</u>	汪兆銘、名大病院で手術、死去(11/10)
					昭和20(1945)	焼失(3月10日上野、3月19日名古屋、5月26日銀座、6月20日静岡、 戦災者用物資配給所、 <u>揚輝荘・聴松閣米軍司令官宿舎</u> に接收	太平洋戦争終戦
					昭和22(1947)	伊藤産業合名会社合併、資本金2900万円、株式6万株公開、栄印刷 創立、社長復帰	
					昭和23(1948)	標語公募「生活と文化を結ぶ松坂屋」、第2回公募株式500円の高値	
					昭和25(1950)	会社創立40周年、名古屋商工会議所会頭、朝日興業合併	朝鮮動乱
					昭和26(1951)	創業340年	
					昭和27(1952)	銀座店改装開店、 <u>揚輝荘・聴松閣米軍司令官宿舎返還</u>	
					昭和28(1953)	名古屋店全館改装開店	
					昭和29(1954)		オリエンタル中村開店
					昭和30(1955)	松坂貿易創立	
					昭和31(1956)		百貨店法、経済白書「もはや戦後ではない」 *昭和30年代の1円は今の10円くらい
					昭和32(1957)	上野店改装開店、ブリッジ	
					昭和34(1959)	関東松坂屋ストア創立	
					昭和35(1960)	会社設立50周年、「松坂屋50年史」	60年安保闘争
					昭和36(1961)	創業350周年、第1回ガス展、 <u>聴松閣・揚輝寮(20室、28名)</u>	岩戸景気
					昭和39(1964)	ローヤル銀座松坂屋オープン、祐茲・河内安福寺に本尊前大机と 総金箔人天蓋を寄進	東京オリンピック